

授業の玉手箱

学びの過程を可視化する工夫

東條 加寿子

学びの過程を可視化することは、授業を活性化し効果的に進めていく手立ての一つです。授業の中で協働的学びを実現することが求められている今、その役割と効果はますます大きくなってきています。教育の ICT 化 (Information and Communication Technology) が促進され、情報処理技術を駆使した双方向性を実現するソフトウェアが、提示装置や PC、iPad などのハードウェアの導入とともに進みつつあります。この ICT の導入の目的の一つは、教育コンテンツや学びの過程の可視化による学びの促進であるといえましょう。

学びの可視化は ICT の導入を待つまでもなく、ちょっとした工夫で実現することができます。付箋に一人ひとりの意見を書き、持ち寄り、みんなでそれを分類したり整理したりすることは、ブレインストーミングや問題の整理に役立ちます (図1)。また、それぞれが持ち寄った考えを一つの図にまとめる作業は、自分の意見の明確化、議論の深化と統合を促進します (図2)。いずれも、作品の完成が達成感をもたらし、何よりも、自分もその中で何等かの役割を果たしたという実感が協働のグッドフィーリングをもたらします。ひとたび可視化した作品は、グループ間での発表や議論に役立ちます。



図1

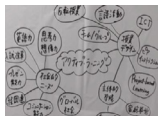


図2

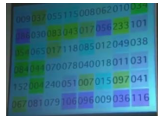


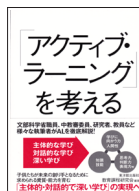
図3

アクティブ・ラーニングの一つの手法と言われるピア・ラーニングでも、可視化が重要な役割を果たしています。ピア・ラーニングはハーバード大学の Eric Mazur 教授の授業実践によって注目され始めました。(その授業風景は <https://www.youtube.com/watch?v=wont2vLZ1E> で視聴することができます。) 大学の物理の大規模授業。大教室で100人を超える学生に対する一方的な講義を、もっと能動的な学びの場にしたいと考えた Mazur 教授は、授業にクlickerと呼ばれる“小さな”装置を導入し受講生一人ひとりに持たせました。講義の中で、問題を投げかけ、多肢選択問題の答えをクlickerで選ばせ、即座にスクリーン上に解答の分布状況を表示します (図3)。そして、その結果を見ながら、近くに座っている学生間で議論させます。答えに自信がある学生は即興 TA(teaching assistant) の役割を果たし、答えに自信がない学生はピアの説明に耳を傾け理解を深めようとします。その後、再度、クlickerを使って二度目の解答送信が行われ、クラス全員が結果の変化を共有します。教員はクラス全体の状況を勘案しながら講義を進め、結果的にクラスが正解に収束していく (正しい理解が深まる) 方向に導きます。

クlickerを使ったピア・ラーニングには2つのポイントがあります。一つは、正解がすぐに与えられないこと。二つ目は、正解という権威が働かない状況で一人ひとりがそれぞれの立場で議論に加わることです。そしてこの能動的な学びの協働を実質化しているのが、クlickerによる学びの過程の可視化という“小さな”工夫です。学びの可視化は、授業改善の“魔法の杖 (magic wand)”になるかもしれません。

書籍紹介

『アクティブ・ラーニングを考える』
 教育課程研究会 (著) 東洋館出版社
 (2016/9/2)、2,160 円、256 ページ
 「アクティブ・ラーニングとは何か」という問いが、教育界の大きな話題となっている。しかし、本書のタ



イトルは「アクティブラーニングを考える」である。「この指導法を実践すればアクティブ・ラーニングであるという考えをもつより、まずは『学習者』を中心として考え、彼らがどのように育つか、そのための1つの方法が『アクティブ・ラーニング』であることを多くの方々に伝えていきたい」と「刊行に寄せて」で紹介している。

本書は、文部科学省職員、中教審委員、研究者等が「主体的・対話的で深い学び」を実現するため、「なぜ、アクティブ・ラーニングなのか」ということを軸に内容を構成して執筆している。

巻頭に掲載の OECD 教育・スキル局長アンドレアス・シュライヒャー氏の「生徒が変わる、学校が変わるアクティブ・ラーニング」は示唆的である。「教えやすかったり、評価がしやすい能力ほど、簡単にデジタル化や自動化できたり、また外部に委託することができる。これは、教育者が直面するジレンマである。今の子供たちは、学校の課題のほとんどをスマートフォンの助けを借りてすぐにこなすことができる。子供たちをスマートフォンよりも賢くしたいというのであれば、我々は学んだことを子供たちがそっくり再生できるかどうかという次元を超えて、子供たちが既知のことから推測をしたり、経験したことがない状況で知識を創造的に活用できたりするかどうかといった視点から物事を見ていかなければならない。」一読を勧める。(中井 弘一)

第 46・47・48 回勉強会案内 / 編集後記



英語教員の皆様の明日からの指導に役立つ実践報告の勉強会で。ぜひお越し下さい。

第 46 回勉強会「英語の教え方教室」

2016 (平成28)年10月15日 (土) 14:00 ~ 17:00

「これまでの私の教育実践と英語力向上のための八日市高校での取組」

滋賀県立八日市高等学校 小椋 清嗣 教諭

「英語での導入」「文法解説のあり方」「多様な音読による自動化」「retelling, summary writing による output 活動」についてお話いただく。



第 47 回勉強会「英語の教え方教室」

2016 (平成 28) 年 11 月 19 日 (土) 14:00 ~ 17:00

「高校3年の受験指導における4技能を生かした活動の模索」

京都市立堀川高等学校 川久保 和代 教諭

受験指導優先で滞りがちな4技能を活かした言語活動を現3年生にどのように実践されているのかを報告していただく。



第 48 回勉強会「英語の教え方教室」

2016 (平成 28) 年 12 月 17 日 (土) 14:00 ~ 17:00

「課題発見能力をはぐくむ授業 一生徒の問いを全員の問いにする」

立命館守山中学校・高等学校 講師 由谷 晋一

生徒が授業中につぶやく問いをクラスに共有し、「課題の発見から課題の解決への思考」につなげる授業実践を紹介していただく。



本教員養成センター Newsletter も 27 号を迎えた。学校現場の英語科の先生にこれからの英語教育について考えていただいたり、明日へ向かう元気を得ていただいたりすることができればと願って、定型の内容で毎年4号を7年間発行してきた。少しでもお役に立つものであったなら幸いである。

今年度で本学を定年退職を迎える私が責任編集する Newsletter は次号を持って最終となる。第 28 号はこれまでとは異なる紙面内容で構成し、7年間の発行を感謝でまとめたと考えている。(な)

大阪女学院大学・大阪女学院短期大学
 教員養成センター Teacher Development Support Center

540-0004 大阪市中央区玉造2丁目26番54号

Tel: 06-6761-9371 Fax: 06-6761-9373

Homepage: <http://www.wilmina.ac.jp/ojc/edu/ttc>

e-mail: ttc@wilmina.ac.jp